

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520231

研究課題名（和文） 初期近代イギリス演劇言語の劇場空間論的観点からの分析研究

研究課題名（英文） An Analytic Study of Early Modern Theatrical Language

研究代表者

市川 真理子（ICHIKAWA MARIKO）

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：80142785

研究成果の概要（和文）：本研究は、シェイクスピア劇をはじめとする初期近代イギリス劇のせりふを劇場空間において意味を成す演劇言語と位置づけ、劇場空間論的観点から分析することにより、高度に演劇的なせりふの用例を分類して提示することにより、せりふを演劇言語として扱うための枠組みを構築した。

研究成果の概要（英文）：This research project dealt with speeches in Shakespearean and contemporary plays as theatrical language functioning in the theatrical space. It has been made clear that certain kinds of speech did not make sense in the fictional world of the play but only in the theatrical space. Such highly theatrical speeches are often found around characters' entrances and exits.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：演劇、劇場空間、せりふ、ト書き、観客

1. 研究開始当初の背景

国内国外ともに、初期近代イギリス劇の研究の大方は文学批評や文化研究、あるいは現代の上演批評に携わり、さまざまな成果を挙げている。そうした研究を直接的ないしは間接的に支える基礎学問の中に、シェイクスピア時代の劇場研究や上演研究がある。市川真理子は上演研究者として、劇テキストを当時の劇場構造や上演（オリジナル・ステージング）との関係において扱うことに従事し続

けてきた。

劇テキストはト書きとせりふから構成される。ト書きに関しては、Alan C. Dessenをはじめ、Leslie Thomson や市川自身も長年、それを特定の時代（初期近代）、特定の空間（当時の劇場）、そして特定の集団（劇作家や俳優等、演劇関係者）の中で機能した特殊な言語と位置づけ、現代では失われてしまった意味や機能を回復しようと論考を重ねてきた。

せりふもト書きと同様に特殊な言語であるが、せりふに関する研究は、独白や傍白、コーラスなど、特別なコンヴェンションを対象としたものにとどまっている。確かに、せりふ全般は、研究対象として余りにも漠然としており、どこから取り掛かるべきか、研究の手掛かりを見つけるのは非常に難しい。市川は、この数年間、当時の演技空間の概念や舞台背後のドアの使用法だとか、シーンの「場」(locale)の研究に携わり、その中で、せりふの意味が劇中の虚構世界ではなく、ある特定の条件や構造の劇場空間でのみ成立するような例にしばしば遭遇した。

せりふに対してもト書きに対するような劇場空間論的観点から綿密な分析調査を施し、議論の枠組みとなるような方法を持つ必要性を強く認識した。

2. 研究の目的

(1) 高度に演劇的なせりふの用例とその分類を行う。具体的には、虚構世界の論理の枠外で機能する高度に演劇的なせりふを、それを構成する語句 (locution) の特徴およびその意味作用 (signification) という二つの観点から分類する。

語句に関しては、たとえば、‘at the door’, ‘within’, ‘here’ のような、劇場や舞台の構造だとか、劇場や舞台そのものに言及する語句を含むものなど、常套的な型を数種類提示する。

意味作用に関しては、次に挙げるようなものを含むいくつかの種類に分類する。

- ① 劇場空間に言及するせりふ
- ② 上演の時間に言及するせりふ
- ③ 俳優や演技の物理的条件に言及するせりふ
- ④ 観客の存在に言及するせりふ

(2) せりふを演劇言語として論じるための方法論を構築する。つまり、上記のようなせりふが語られる箇所は、シーンの冒頭や末尾、俳優の登場や退場の付近に多いのではないか、という印象を持っている。こうした箇所は、虚構世界の事実と演劇空間の現実とのバランス関係が崩れ、演劇的現実が露出しやすいからであろう。この仮説を裏付ける客観的データを示す。

(3) 具体的な問題に応用する。特に、せりふを演劇言語として見る視座と方法を持つと、上演研究や劇テキストの編纂、そして文学批評の分野においてどのような問題を再考することができるか具体的に示す。例えば、劇世界における時間経過や場所の設定だとか、テキスト内のシーンの切り方など、これまで自明とされていたことも、当時の観客の劇場における経験という観点から再考す

る。

3. 研究の方法

本研究は、大別して、次の三つの営為から構成される。

(1) 劇テキストの調査・分析によるデータ収集。ファクシミリで間に合うものは国内で分析し、直接オリジナル・テキストを調査する必要のあるものは British Library および Folger Shakespeare Library で閲覧し調査した。現代の劇場の上演では意味を成さなくなるせりふなども収集し分析した。

(2) 関連する諸研究の調査および研究。劇場、舞台、演技に関する諸研究をはじめ、演劇全般を対象とする空間論だとか、記号論や表象論なども視野に入れた調査および研究を行い、理論を構築するための基礎を築いた。

(3) 論考の作成および理論の構築。研究の一端をなす問題に関して論文を書き、オリジナル・ステイジングや関連諸分野の研究者たちのレビューを求めた。

4. 研究成果

シェイクスピア時代の劇場空間におけるオリジナル・ステイジングの復元の観点からせりふの問題を扱う論考、とりわけ ‘within’ や ‘at the door’ 等をふくむせりふが劇場空間においては直接「舞台裏」や「舞台のドア」を指示した可能性を示唆する事例を集めて、その成果を発表した。

テキストの分析を行う中で、劇作家による違いも明らかとなった。具体的には、せりふの意味作用には各劇作家の意識的ないしは無意識的な演劇観が反映されており、例えば、Ben Jonson は、「劇」(plays)ではなく「作品」(works)を書くことにこだわった作家らしく、せりふの中では、あくまでも虚構世界の中で意味を成すよう ‘at the door’, ‘within’ 等の語句を使おうとした、というようなことが確認された。

特に重要な成果として、シェイクスピア時代の劇場空間におけるオリジナル・ステイジングの復元の観点からせりふの問題を扱う次の論考が挙げられる。「シェイクスピア劇のせりふ - 劇場の現実と虚構の事実 -」(『シェイクスピア - 劇場・俳優・テキスト』(研究社出版、2012 出版予定)。本論文において、劇場空間に言及するせりふおよび俳優の登場や退場の付近のせりふの意味作用に関する仮説を証明することができた。

その中から、具体例として、特に ‘within’ に関する考察を含む部分を抜粋する。

通常、とりわけシーンの設定が家の外部ないしは家の内部となっている場合、「中に」

(within) という語がその家の内部を指していることは明瞭である。例えば、『ヴェニスの商人』二幕六場では、遅れて到着したローレンゾーは待っていた友人たちに「ここに親父のユダヤ人が住んでいるんだ」(二五行)と言った直後、「おーい、中に誰かいないか」「Ho! who's within?」とジェシカを呼び出す。「中に」とはシャイロックの家の内部を指し、楽屋正面壁がその家を表象している。同様のフレーズが『ヘンリー六世・第二部』一幕四場でも語られるが、ここではどうだろうか。このシーンの出来事は、グロスター公爵邸の庭園で起こっているようである。公爵夫人が魔女や呪術師たちに霊を呼び出させ、ヘンリー王やその周辺の者たちの運命を聞き出した直後、ヨーク公爵とバッキンガム公爵が踏み込んで公爵夫人たちを逮捕し、護衛の者たちに彼らを連行させる。バッキンガムが王の許に向かい、一人残ったヨークがシーンの終わり際に語るせりふは、「おい、中に誰かおらんか」「Who's within there, ho?」(七七行)である。これに応じて彼の召使が登場し、ヨークは用事を言いつける。ヨークはグロスター公爵邸内部を「中」と称しているのか。もしそうならば、ヨーク自身の召使がグロスター公爵邸の中に控えていたのか。このような疑問が観客の頭をよぎることはないだろう。このシーンの場 (locale) がグロスター公爵邸であることは確かだが、シーンの最初から最後までその場所が明確になっているわけではない。舞台装置のない劇場では、場所は曖昧になりがちである。たぶん、グロスター公爵夫人たちが退場した後、シーンの場所はかなり曖昧になるだろう。たとえ「中に」という語の虚構世界の中の意味が曖昧でも、呼ばれた召使が楽屋の中から出てくるため、「中に」という語は劇場では十分に機能するのだろう。

「中に誰かいないか」「Who's within there!」およびその簡略形「Within there!」、「Within!」などは、控えている召使などを呼ぶ極めて一般的なフレーズである。この機能的なせりふの目的は多くの場合、俳優に楽屋の中から姿を現させることであり、かなり機械的に使われている。無論、多くの場合、虚構世界においても「中に」という語が十分に機能する。また、たとえ機械的に使われていても、当然ながら、虚構の設定に明らかに矛盾するような使われ方はしていない。しかし、上のように、厳密に分析してみると虚構上の設定から多少外れるような例は、せりふとは虚構世界の実と劇場空間の現実とのバランスにおいて意味を成すよう作られ、そして、そのバランスがかなり劇場空間の現実へ傾くことがあるということを示している。

退場の付近にも目を向けよう。『リチャード三世』一幕四場で、第一の刺客はクラレンスを刺して彼を運び出す。その際彼が語る

せりふは「これを食らえ。これもだ。まだ足りなければ、中にある葡萄酒樽にどっぷり漬からせてやる」(二六九～七〇行)である。しかし、同じシーンのしばらく前には、彼はクラレンスの体を「隣の部屋の葡萄酒樽にぶち込む」(一五五～五六行)と言っていたのである。おそらく、ここでは、退場する人物たちが虚構的な意味において内部に向かって行くか否か、全く問題にはならない。俳優たちは楽屋の中に入って行くのだから、「中にある」は劇場では十分機能した。登場や退場の付近にあるせりふには、極めて劇場的に機能するものが多い。そのようなせりふに虚構世界の論理を押し付けることは意味のあることではないだろう。(以上、拙論「シェイクスピア劇のせりふ - 劇場の現実と虚構の事実 -」より)

また、下の「主な発表論文等」の欄に記す英語論文は、いずれも、これまでにない視点からの研究として特に国外で高く評価された。

この研究は劇場空間における物理的現実と虚構世界の事実との関係に関する新たな問題を考える必要性を認識させた。今後は、舞台構造や小道具等を巧みに利用した初期近代イギリス劇特有の空間的メタファーとも呼べるような視覚的表現の研究に当たりたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

市川 真理子, 「シェイクスピア劇のせりふ - 劇場の現実と虚構の事実 -」、『シェイクスピア - 劇場・俳優・テキスト』(研究社、2012) [掲載確定] 査読有

Mariko Ichikawa, "Stage Directions and the Stage Space", *The Cambridge World Shakespeare Encyclopedia*, vol. 1 (Cambridge University Press, 2012) [印刷中] 査読有

Mariko Ichikawa, "A Special Meaning of 'Within'?", in *Shakespeare Closely Read: A Collection of Essays* (Fairleigh Dickinson University Press, 2011), pp. 9-17 査読有

[学会発表] (計3件)

市川 真理子, "Shylock and the Use of Stage Doors", Andrew Gurr 教授京都セミナー (日本シェイクスピア協会主催), 2011年10月27日、京都

Mariko Ichikawa, "Pindarus Above", 5th

Blackfriars Conference, Stanton, VA, USA
2009年10月26日

市川 真理子, 「シェイクスピア時代における
“Within”の意味と用法」、第47回シェイク
スピア学会、つくば、2009年10月3日

[その他]

ホームページ等

[http://db.tohoku.ac.jp/whois/detail/51a
93bdf77d975c55322253418f5bb2b.html](http://db.tohoku.ac.jp/whois/detail/51a93bdf77d975c55322253418f5bb2b.html)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市川 真理子 ICHIKAWA MARIKO)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：80142785

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：